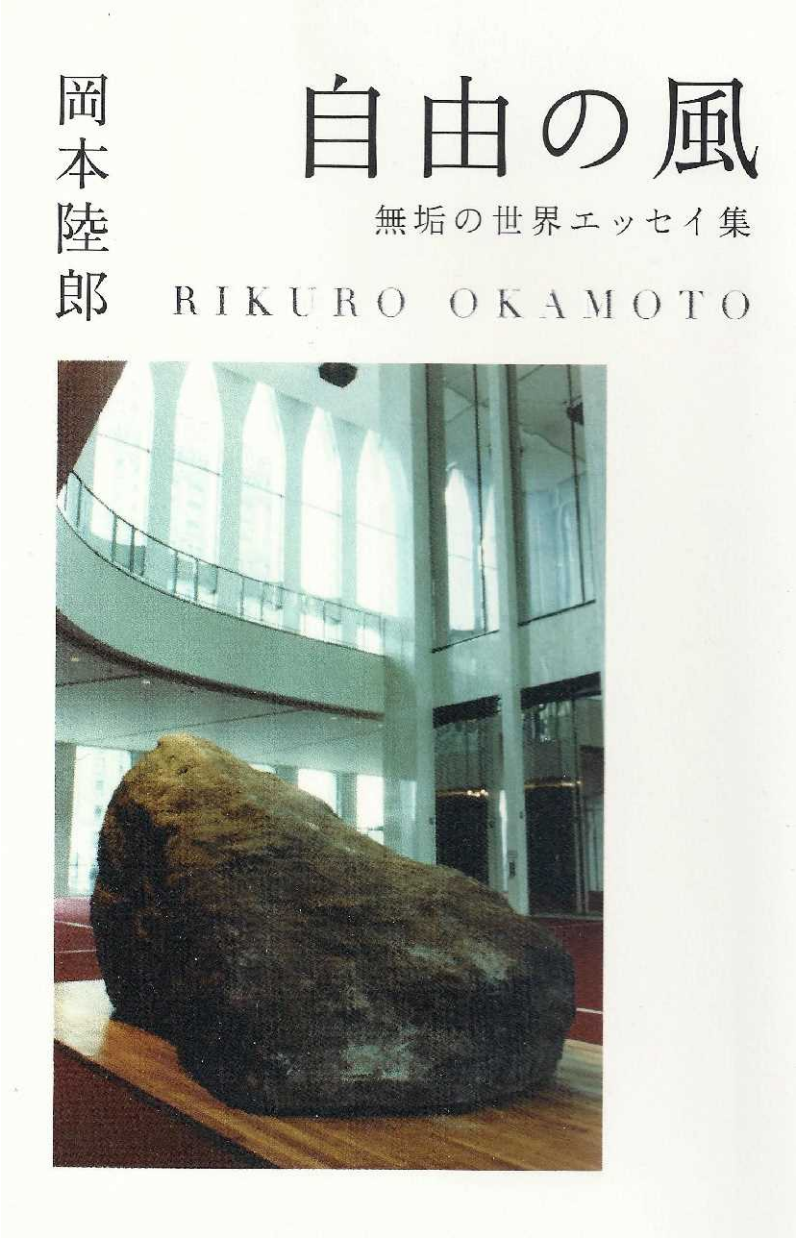
第684回 関西蔵前午餐会

2015-9-1（Tue） 13時～

講師：岡本陸郎様のご口演原稿のファイルです。
関連使用された『スライド※1 』は、
同じデータベースに、『ご講演資料』として
収録しています。併せてご覧ください。
（スライドの一部を削除しているので
　文中のスライドNoは一部異なっています。
　あしからず、ご了承下さい ）

午餐会 HP担当者



（スライド１）ただいま紹介をいただいた、岡本です。昨年 「自由の風」という随筆を出版しました。随筆というのは我々一般人がごく身近な生活の中の光った面白いものを文章としたものです。
日本の鴨長明や吉田兼好やアメリカの随筆家ソローの随筆に一貫して流れる随筆の精神というものが、また、芸術一般にも通じるものである事をお話したいと思います。

まず、僕自身の随筆「自由の風」についてお話します。
（スライド２,3,4）僕は物心ついた４、５才の頃、最初の記憶が絵を一人で描いていました。それ以来ずっと毎日絵を描き続けて今に至っています。
小学校１年の時に同級生であった女の子のお父さんがたまたま松永光玉という画家であって、画塾を作って子供達に教え始めました。僕も誘われて参加して、毎週末に絵を描く事を始めました。この写真は１９５０年頃ですが、６畳間を二つつないだ部屋にミカン箱を並べて、その上に板を並べて机として、２列に並んだ子供達が，この日は花を写生しています。リンゴやミカンや静物を描いたり、お互いに前の人を描いたり、自由画を描くようにという主題を毎週与えられて描きました。デッサン、クロッキー、写生の基礎を長年にわたって教わりました。前の週に描いたもので良かったものは、賞、特賞の評価がついてふすまに張り出されています。生徒は多い時は３００人にもなりました子供が多過ぎて畳が波打ってしまうほどでした。先生一人では教えきれないので、東京芸大の学生達がアルバイトで教えてくれました。
なつかしいセピア色の写真です。
（スライド５）これは僕が１３才の頃の先生ご夫婦との写真ですが、先生とは８５才で亡くなられるまで頻繁な手紙の往復がありました。
（スライド６）２００６年に美術館を大分県と熊本県の県境に建てる事が出来ました。
（スライド７）その２階に先生の「爽」さわやかという２曲一双屏風のこの作品を先生のご家族から寄贈していただいて常陳展示させていただいています。８２才の時の先生の最高傑作で非常にありがたい事と思っています。
（スライド８）画塾に通いながら、いろいろのアーティストに出会って行ったのですが、小学校５年の頃にセザンヌを知りました。セザンヌはこの「サン、ビクトワール山」という故郷のエクスの山を数十枚も描いています。セザンヌはパリに若い頃に出かけて芸術家たらんとしたわけですが、うまく行かなくて、故郷のエクスに帰って来て、この子供時代から見慣れていたサンビクトワールの山を天気のよい日には毎日描いていました。
（スライド９）雨の日には、このリンゴや静物を何十枚も描き続けました。山や静物という日常生活のごく見近なものを描くという事は当時誰もやっていなかった革新的なものだったのです。それまで絵画とは中世からずっと続いてきたキリスト教の神話、聖書物語の宗教画や王侯貴族の注文による肖像画などだけが絵画，芸術だと誰もが思っていたわけです。こういう身のまわりの何でも無い普通一般に見慣れているものの中にすばらしいものを見つけて作品としようという事は全く新しい独創的な前例の無い斬新でオリジナルなものだったのです。

（スライド１０）これは近所の少年にモデルになってもらった「赤いシャツの少年」で僕も小学校から中学校の頃に一人で自宅で模写を何度もした事のある思い出深い作品です。こういう近所の普通の子供にこれは面白いなというものを発見して作品とする、という事もまた独創的な事であったわけです。また、テクニック、技術もそれまでになかった全く新しい独創的なものでした。今、１３０年経ってもきのう描いたように新鮮なパワーに僕は打たれています。
芸術とは独創的なオリジナルなものである事が最も重要です。セザンヌは、主題、テクニックの両方に非常にオリジナルだったのです。
芸術というものは、それまでに存在しているものの部分をちょっと変えたり、バリエーションを作るといった事では全く充分でなく、無意味なものです。根本的に主題、技術ともにオリジナルであるという事こそ重要です。
（スライド１１）セザンヌのつぎに僕は小学校５、６年の頃にピカソに出会っています。これは３、５x７．８メートルのゲルニカです。これを描くためにピカソは非常に慎重に部分、部分で下書きを沢山準備してから描いています。ただむやみに描いているわけではなくて、慎重な準備と計算がなされています。それでいて慎重なばかりでなく、自由自在で非常な大胆さ、斬新な面白さに満ちています。
（スライド１２）これはニワトリですね、よく見ると後ろのこのボヤッとした部分からは最初に何か別の作品を描いていたものが変形して行ってニワトリになったという事は読み取れます。最初はニワトリではなく別のものを描き始めたのが、描いている最中に全くたまたま面白いものとなったものを捕えて作品にしています。こういう偶然さえも味方にしてしまうという自由自在さがあります。
（スライド１３）これはピカソの日常生活でパンを並べています。ピカソはこういう日常生活にヤンチャな稚気や面白がりの自由の精神があふれていた人で、それ故にパワーにあふれた作品を作り続けています。
（スライド１２）戻ってみますとこのニワトリとピカソは、足の部分、また全体の雰囲気など殆ど同じである、このニワトリはピカソの自画像なのですね。つまりすべての作品は自画像である。ピカソにはこの遊び心、ヤンチャ、稚気、面白がる心、自由自在の精神があります。芸術にはこれが非常に重要であって、ピカソの重要な生まれつきであって資質でもあったわけです。
（スライド戻って１１、１０、9）ピカソのゲルニカも自画像であり、先ほどの山や静物や少年も全てセザンヌの自画像であるわけです。全ての作品は作者の自画像であって、その作品を見る事によって、その人が何を考えて生きていたか、何を面白いと思って生きていたかを知る事が出来ます。芸術家は彼等の作品を見る事によって彼等と会話する事が出来ます。
僕はピカソ、セザンヌばかりでなく、他にもレンブラントやジャックソンポロック，フェルメール、日本の北斎など沢山の芸術家に出会ってきました。
（スライド１４）そして１９６９年に２６才で芸術家たらんとニューヨークへ渡りました。では、僕の作って来た作品についてお話します。僕の作品には立体作品と絵画作品の２種類があります。
これは美術館の立体棟に展示してある作品ですが、大理石の１、８x３．６メー

トルの「動く壁」。４．７メートルの「動く岩」。３メートル立方のステンレスの「動く立方体」があります。すべて巨大な重量感のあるものがゆっくりと動いている作品です。
（スライド１５）また、絵画作品があります。これは１、８メートルx３、６メートルのキャンバスに２４２枚の作品を２年間かかって描き込んだ作品です。
（スライド１６）まず「動く岩」についてお話します。
（スライド１７）岩はニューヨークのセントラルパークの岩を型取りしてから、プラスチックFRPに砂や色を混ぜて厚さ１、５センチに鋳込んだものです。これはセントラルパークで４．７メートルの岩を手伝いの美術学校の生徒達と１０人で型取りを１０日かけてしました。
（スライド１８）型取りはセントラルパークの事務所から許可書をもらう必要が有りました 。岩の型取りが終わる度に岩の色が変わっていないか、環境に変化がないか、などをチェックしてもらって、次々に許可書をもらって仕事を続けました。
（スライド１９）まず最初にレイテックスというゴムを塗っています。
（スライド２０）ゴムの次にその上に石膏の型を作ります。ゴムの型が乾いた所で、その上に白い石膏を塗っています。ゴム型と石膏型の両方が出来て始めて型取りの完成になります。後ろには１、２メートルの箱を二つ置いて夜は材料を入れて、また、型取り最中の岩には雨に濡れないようにプラスチックをかけました。
（スライド２１、２２）徐々に型が出来上がって行きます。
（スライド２３）ほぼ型取りの完成した１０日目で、みんなでほっとしてティータイムのお茶をしています。
（スライド２４）岩の型取りは最初から４、５メートルのような大きなものは出来ないので、、徐々に小さいものから始めてだんだん大きなものを作って行きました。これは小さな初期のものです。こうして石膏型に番号を書いて後で自宅の仕事場で組み立て直して鋳込みを行います。
（スライド２５）大きな４．７メートルの岩は小さいものとは違ったこういう木材の基礎を作る事が、仕事場の部屋で位置をきちんとどこで鋳込みを行うかに必要でした。
（スライド２６）この基礎の上に、取って来た型を天地が上下逆に置いて組み立てて行きます。
（スライド２７）美術学校の学生がアルバイトで組み立てをしています。
（スライド２８）石膏型は番号を現地で書いたものに従って、三次元のジグソーパズルのように上下逆にして組み立てて行きます。
（スライド２９）この石膏型の中にゴムの型が入っています。
（スライド３０）ほぼ型の組み立てが完了した所です。足場を作って登って行って、天井から下ろした鉄の梯子を下りて中に入ります。左の白いのがプラスチックFRPのドラム缶です。
（スライド３１）こうして中に入って鋳込みを行います。FRPは毒性のあるガスを固

まる時に出すので非常に危険です。 これによってアーティストが何人も亡くなっています。ガスマスクと長靴、二重のプラスチック防護服を着て仕事しました。隣の部屋に置いたエアコンプレッサーから新鮮な空気を送ってガスマスクで鋳込みを行っています。

（スライド３２、３３）FRPに砂や色や鉱物を混ぜて厚さ１．５センチに鋳込んで、ファイバーグラスで強化してあります。

（スライド３４）鋳込みが終わって石膏の型とゴムの型をはずした所です。ゴム型はこのように外す時に切ってしまうので２度と使えないので、ただ一度の勝負です。一つの型からは一つの作品しか出来ません。慎重にこの作品も２年間をかけています。

（スライド３５、３６）鋳込みを終わった岩は大きすぎるので荷物用エレベーターに入るサイズに切断します。この穴の開いた小さな３センチの金属の部品を取り付けて、また接続の時には小さなボルト・ナットで繋いで行きます。全部で数百のボルト・ナットになります。

（スライド３７、３８）内部はアルミのL字型の５センチ角で厚さ３ミリの部品を組み立てています。これによって大人５、６人が登っても大丈夫なようになっています。

（スライド３９）内部構造は中に人が入って働けるように設計してあります。ここにもう一つの片を組み立てると完成になります。

（スライド４０）OKハリス画廊での個展です。１９８６年ころです。

（スライド４１）「動く岩」などの動く三次元作品はコレクターによって設置してほしいという広場などに，設置しました。メインテナンスの男が手伝ってくれてコネチカットに設置した時です。

（スライド４２）シカゴで設置した時に，メインテナンスの二人がジョークで大きな釘を打ち込もうとしました。アメリカというのは何事も深刻ぶらないで、なんでも面白がってジョークにしてしまう、この軽やかさがアメリカのよい所です。僕の一部でもあります。

（スライド４３）これはバーモントというコレクターとエリー湖の近くに設置した時です。

（スライド４４）動く立体作品にはステンレスの鏡面仕上げした立方体がゆっくりと動く「動く立方体」があります。OKハリス画廊での個展です。

（スライド４５）「動く立方体」の内部構造をアルミの５センチ角で作っています。この基礎部はこれから上に伸びて行きます。この基礎部は大き過ぎてエレベーターに乗らないので、４つの部分に分けて解体して、展示の際にはまた組み立てる事が出来るように設計してあります。

（スライド４６）「動く立方体」の内部構造です。

（スライド４７）「動く立方体」は将来、巨大なビルのようなサイズのものを作る事も可能であるという事を写真にしています。

（スライド４８）動く作品は数十年にわたって殆どメインテナンス無しで動く事を目

標に作りました。これは実験装置の一つでこういう金属で作った実験装置を２年ほど自宅の仕事場で動かして実験しました。
（スライド４９）交流電源のモーターを使っています。リレーやマイクロスイッチを使っています。２年間ほどいろいろ部品を変えたりしてこの配線図に到達しています。今３０年以上経っていますが、美術館でも全く問題なく毎日動き続けています。
（スライド５０）これは１９８３年にニューヨーク世界貿易センターでの展覧会の写真です。世界貿易センターは２００１年の９、１１にテロ攻撃で倒されていますが、僕にとっては展示の際に通った思い出もあり、実に巨大で美しいビルだったので残念に思っています。この作品は今エリーに健在です。
（スライド５１）カトーナ美術館での展示です。
（スライド５２）２０１１年３月に美術館の関係者の人達がセントラルパークに３０年前に型取りをした実際の岩を見に来て、登ってもらいました。
１９８６年頃に一番大きなこの岩を鋳込んで作るという目標が達成出来たので、それ以後は絵画作品に専念して来ました。
（スライド５３）これは１、８x３、６メートルのキャンバスに２４２枚の絵画を描き込んだ作品で２年間かかっています。同じような作品を沢山作っています。身のまわりの日常生活のすべての要素を描いてしまおうとしています。
（スライド５４）これは広大な平原をバックに身のまわりの要素を描き込んだ作品です。
（スライド５５）1万メートルの上空から見た地球をバックにしています。
（スライド５６）トルコの平原をバックにしています。
（スライド５７、５８、５９）いろいろな自分の中の要素を全て描いてしまおうとしています。
（スライド６０）また、アフリカやアマゾン、ギリシャなどを旅してきました。これはモンゴルの遊牧民の親戚のいる若いカップルに運転手と案内人になってもらって、ロシア製のボロ車でモンゴルの大草原を１週間旅した時のものです。遊牧民が二人、馬に乗って突然現れて、一緒に粗末では有るけれど、光に満ちたすばらしい朝食をしています。
（スライド６１）遊牧民のテントに泊めてもらったのですが、我々旅人が到着すると地平線のかなたのテントに住んでいる隣人達が気がついて集まってきて一緒に写真を撮りました。普段は獰猛なこの２頭の黒い犬も写真を撮るよ、と言ったら、ポーズをしてこっちの犬などはかなり凛々しいポーズをしています。
（スライド６２）これはコスタリカのジャングルの泥の川を馬で渡っています。
（スライド６３、６４）こうして旅行したモンゴル、ギリシャ、アメリカ、アフリカなどの国々の風景を描き込んで、縦２、１メートル、横６、９メートルに２３枚の風景が描いてあります。大岡山の東工大百年記念館に展示してあります。
（スライド６５）２００６年に大分県九重に美術館をオープンして今、丸９年が経っ

ています。
（スライド６６）ニューヨークから作品は部分に解体して運び、また組み立てました。（運搬用の巨大な箱が３０箱になりました。）
（スライド６７）これは絵画展示室です。
（スライド６８）僕は東京に育ちましたが、２００６年にこの阿蘇を遠望出来る場所が新たなフルサトとなりました。温泉や自然に恵まれたすばらしい所です。そこで、この近辺の自然や風物、人間などを描く「フルサト」のシリーズを描き始めました。毎年５、６点を加えて今４０点ほどになっていてこれからも増えて行く予定です。これは五十カラという下を向いて木の幹に止まってクルクルまわりながら虫などをつついて食べる鳥で、下を向いて止まる事の出来る世界唯一の鳥です。しかし、これと全く同じNathatchという鳥がニューヨークにもいます。太平洋を越えてなぜこんなに全く同じ鳥がいるのか、実にフシギです。誰かがいつかこういう鳥の分布がなぜ起こっているのか調べたら面白いのではないかと思っています。
（スライド６９）美術館から車で２時間の熊本県の金峰山には頂上に茶屋が有って、今から４０年ほど前に年寄り夫婦が手の上にピーナッツの砕いたものを乗せて毎日やっていたら、ヤマガラが飛んで来て食べるようになりました。今でも次の世代の若い夫婦が茶屋を引き継いでやっています。美術館関係者の串山真教さんと一緒に出かけてピーナッツを手の上に乗せてただ立っていると本当に野生のヤマガラがやって来て手から食べました。
（スライド７０）５０年来の友人である服部靖郎、通子さん夫妻に美術館から２０分の大観峰の風景の中に坐ってもらいました。日本には珍しい雄大な風景です。
（スライド７１）３年ほど前にこの茶色の蝶が大発生しました。黄色の花は外来種の新種だそうです。自然というのは毎年大発生したりいなくなったり、予測出来ない面白さに満ちています。
（スライド７２）美術館から２０分の産山には眺めの雄大な丘が連なった場所があって、そこに右の男ばかりで６人で行った事が有ります。その時の５人に左の女性達も加えて９人の作品にしてみました。
（スライド７３）僕は東京で育ったのですが、子供時代には東京にもこういう緑色のアマガエルが沢山いました。今では全く東京では見られなくなっています。美術館から２０分の森の中 にこのアマガエルを数十年ぶりに発見してうれしくて作品にしました。
（スライド７４）このあたりには牧場も沢山有って霧が発生すると牛や馬も飲み込まれて行きます。
（スライド７５）１９６４年に始めて出会って以来、去年２０１４年に５０年ぶりにこの５人が美術館の管理棟で乾杯しました。屋内で乾杯したのですが、美術館から２０分の山また山の雄大な風景の中に置いて描いてみました。こうして描いてみると、それぞれの人がこのビールを乾杯している腕の上げ方、腕の角度、体の

開き方、まったくその人そのものなのです。それぞれ他の人に全く無いものです。誰かと取り替える事が出来無い、人間は本当に面白い、興味が尽きないなと思いながら作品としました。
（スライド７６）道ばたのどこにでもある緑の草の中に貝殻のような小さなシジミ蝶が羽根を休めていました。よく見ると羽根がもう破れてきっと一週間くらいの冒険の日々を過ごして、柔らかな日の光の中にゆっくりとしているのを作品としました
（スライド７７）美術館から２０分ほどの地点に朝５時ころ行くと、真っ暗な中に朝日が静かに横から当たって来て、一日が開けようとしています。阿蘇の五岳です。こういう素晴らしい雄大な風景と自然と温泉に恵まれた所を２００６年から新たなフルサトとして作品を作って来ました。
（スライド７８）僕は１９６９年からニューヨークに４５年以上住んで、ニューヨークもフルサトになっています。僕自身ニューヨーカーであると思っています。ニューヨークでの生活と仕事についてお話しします。こういうプレスドリルやパワーソウなどの道具でいつも仕事しています。キャンバスや額縁などすべてを自分で作っています。
（スライド７９）アームソーを使って毎日仕事しています。
（スライド８０）我が家の入ってすぐのドアですが、これらは小さな作品です。これは今飼っているムクという犬です。
（スライド８１）パソコン２台などの仕事机です。作品が並んでいます。
（スライド８２）犬はラサアプソ種の犬をこれまで４０年近く、今５匹目ですが、最初のテフテフという犬です。僕のTシャツを着ています。
（スライド８３）これは今の５匹目の、ムクという犬で我々人間よりもその存在は、ずっとずっと大きいという事をカードにしたものです。
（スライド８４）家から歩いて東５分の所に小さな公園が有って、毎日ムクと散歩に行きますが，スズメがこのように一列に並んで迎えてくれます。ニューヨークのスズメは人なつっこくて、手からパンをもらおうと待ち構えています。
（スライド８５）坐ると足元にみんな並んできます。これもカードにしたものです。
（スライド８６、８７）こういうスズメを作品にしています。
（スライド８８）同じ公園にはリスもいて、ドングリ（ヘーゼルナッツ）を持っているのを知っているので遠くの方から走って来ます。フェンスに登ると、 左がオス、右がメスと雌雄の違いがよくわかります。こういうニューヨークをフルサトとするニューヨーカー達を作品として作り続けて、今４０点以上になっています。これからも増えて行く予定です。
（スライド８９）春の若いリス達が楽しく遊んでいます。
（スライド９０）中には馴れ馴れしくに肩に登って来てドングリを食べ続けるものもいます。
（スライド９１）この公園のそばの２３丁目とブロードウエイにはこういう誰でも坐

って良い椅子とテーブルと日傘が沢山置いてあって、そこでいつもパンと水と果物の朝食を食べています。
（スライド９２）スズメも沢山やって来ます。
（スライド９３）ニューヨークは地下鉄に自転車を乗せても良いので、地下鉄で１時間の所にジャマイカベイという湿地帯があって、水鳥が沢山います。マガモのヒナが泳いでいます。
（スライド９４）ヒナの一羽が母親から離れて大急ぎで水面を走って戻っています。
（スライド９５）セントラルパークは自然の宝庫です。緑のカエルがいます。
僕は自分だけの自然の観察地点をいくつか持っていて、いつもカメラを持って望遠３００ミリから広角レンズ２５ミリで写真を撮っています。これまでに数万枚の写真を撮って、それらの写真を参考にして作品を作っています。
（スライド９６）これは最近この７月に撮った写真で、まだ暗い朝４時に起きて出発して、地下鉄で１時間半、ロングアイランドの終着駅に着いて、そこから又自転車で１時間走るとロングアイランドの先端のブリージーポイントに到着します。殆ど人はひとっこ一人いない所です。そこにはアジサシが数百羽もコロニーを作っています。アジサシは毎年南極から北半球へ７万キロ近い渡りをしてニューヨークには６月から７月にかけて産卵のために来ます。ハトをちょっと小さくした鳥で、大変なエネルギーを持っているのに驚きます。これまで数十年にわたって彼等の写真を撮り続けて来ました。写真を撮るために近くへ行きますが、彼等の営巣地には踏み込まないように巣から５mの距離まで行きます。数百羽がすぐ気がついてワーッと飛び立ちます。触れる事はないのですが、 僕をめがけて空中を数百羽が襲って来ます。これは迫力があります。 僕はただじっと動かないようにカメラを持って立っています。すると魚雷攻撃をして来ます。魚雷というのはクソの魚雷で次々に白い糞をこちらめがけて落としてきます。これをよけないで、１５分から２０分、この糞の洗礼をジッと立ったまま受けているとやっと静かになって来て、それぞれの巣に戻って、徐々に普段の生活の姿を見せてくれます。すると草に隠れていたヒナがチラホラと姿を現してきます。すると、親鳥も海から小さな銀色の魚をくわえて来て、ヒナに口から口へとやるシーンも見る事が出来ます。
（スライド９７）こういう身近なものを文章にして、去年「自由の風」という随筆を出版しました。
では、随筆というものについてお話します。
（スライド９８、９９，１００）日本の古典の方丈記、徒然草というものは、本当は生き生きとした面白いものなのですが、高校の授業となると、説教くさい、教訓的な抹香くさいものになって全く面白くない。今日はなんとか、本当は説教くさいものではなくて、こんなに面白いものなのですよ、という事を話してみたいと思っています。
方丈記というものを鴨長明が１２１２年に書いています。この方丈は３メートル

四方の掘ったて小屋のようなものを自分で設計して、晩年の８年を住んだのですが、壁は掛けがねでいつでも外せて移動したい時には動かす事が出来る、組み立て式住居で荷車二台で移動出来る、と書いています。こういうボロ小屋を自分で設計して創意工夫の人でした。内部には、組み立て式の琵琶や琴を持っていて、なかなかの音楽の名手だったようです。京都の人里をちょっと離れた渓流の水の便もある日野山の上にこの方丈の小屋を置いて晩年の８年間を生活し、そこで随筆の方丈記や発心集、無妙抄というものを書きました。これは王朝文学の源氏物語や枕草子といった現実感，生活感の殆ど全く無いものとは違っています。 宮廷とは無縁な官位の無い無官の普通人が見た生活感のある普通の生活とはどういうものであったかを書いています。例えば，地震や大火や飢饉で、京都では２ヶ月で４万数千人もの人間が餓死して死体がゴロゴロしていたという記述があります。王朝文学にはこういう京都に死体がゴロゴロといった記述は全く有りません。長明には事実を客観的に明白に見つめようという姿勢が有りました。これは全くオリジナルなものだったのです。 普通人の生活そのものをの客観的に見つめようというリアリストだったのです。それ迄に全く無い斬新なものでした。
王朝文学の源氏物語などにはミヤビではあるが、男女の愛憎や、その背後にある政治権力の争いという世の濁りがあります。これとは全く無縁の 「世の濁りに染まない世界」を書こうと長明はしています。近所の友としている少年の話や自分はこういう自然の中で心静かに生きる事こそ面白いと思って生きているという事を書いています。何が面白いかを明確に持っていた人です。それでいて、どこかにそういう自分をバカな無益な滑稽な事をしていると客観視して笑っている所のある人です。
（スライド１０１）「無名抄」という歌論を書いています。当時、新古今集の藤原定家の幽玄体という観念的で全く現実感の無い人工的な歌の世界こそ、宮廷の権威であったのですが、そんなものはちょっと学べば簡単に作れる、と言って実際にそんな歌を作ってみせています。こういうものが権威であった時代に生きた長明はリアリストだったために生きにくい時代だったのです。
（スライド１０２）「発心集」という発心をした人の例を１００以上も集めています。発心とは何に発心したかというと「世の濁りに染まない」という発心して、その発心をした人とはどういう人々であったかという例を書いています。いくつか例をあげてみますと、
①位の高い僧とうやまわれて尊敬されていた人がある時突然、世の濁りにそまりたくない、と発心していなくなってしまった。みんなで探したけれどなかなか見つからなかった。ある人が旅をして遠い所の川で船の渡し守になっていたのを発見して、あなたはあの尊い人ではないですか、と拝んでいたら、またいなくなってしまったという話があります。
②それから、高名な医者がいて、天皇が病気になったので来てほしいと使いの人をよこした。それでは行きましょうと二人で出かけたのですが、途中で貧乏人の

病人に出会って、貧乏人は自分が助けねば誰も助ける人がいない、天皇には他にも医者が沢山いるから自分は行く必要がない、と言って貧乏人の方にかかりきりになって天皇の方には行かなかったという話があります。こういう、いなくなった高徳の僧やこの医者に長明は共感して書いているわけです。
③また、笛の名人がいて、ある時友人と笛を吹いていたら、天皇が使者を送ってきて、自分の所で吹くようにと言われたのですが、友人と笛を吹く事に興がのって来て吹き続けて終わる事がない。仕方なく使者がそれでは帰ります、と言って帰って天皇に、興がのって笛を吹き続けて全く来る気配がありません、と話をしたら、天皇は怒るかと思ったら怒らないで、むしろ、そういう音楽というものに我を忘れるという事こそすばらしい事だ、と感動して涙ぐんだ。とあります。これをちょっと考えると、ヨーロッパや中国では例えばシェイクスピアの世界や中国の聊斎志異といった世界では、王侯貴族の命令にちょっとでも従わないとすぐ首をはねて殺したりしています。こういう事が起こるのは日本だけなのです。日本というのはこういう人間の存在を許して、そればかりでなく、その上にむしろすばらしいとして感心して涙ぐんだりする、そういう一種軟弱なところがある。軟弱というのは日本の文化の大きな特徴です。そこが僕は日本の文化の世界にない、強靭ですごい所だと思っています。勿論、また鴨長明もそれをすばらしいとして後世に書き残しておきたいと書いているわけです。
（スライド１０３）徒然草は方丈記の１００年後くらいに書かれたものですが、吉田兼好という人は生没年もはっきりしていない、大体鎌倉時代末期の１３３０年頃と言われています。宮廷生活に嫌気がさして普通人の生活を送った人です。随筆というのは我々普通人の生活の身近なものの中に光ったもの、面白いものを見つけて文章という作品にしたものです。
（スライド１０４）京都の双び丘に住んで、当時の知識人と思われた仁和寺の坊主、僧の失敗譚も沢山出て来る面白いものです。１５０以上の話が書いてありますがその内のいくつか紹介してみますと、
（スライド１０５）①ある時、賀茂の神社で競馬があって、吉田兼好も見物に行った。見物人が沢山群がっていて兼好も後ろの方で見ていました。向こうの方に坊さんが木に登って居眠りをして何回も落ちそうになっている。それを見てあたりの人がなんてバカな奴だろうとみんなで笑い者にしているので、兼好は一言言ってやろうと「みなさん、あの人をバカな奴だと皆でバカにしていますが、こうしてこんな競馬なんてものを見物してウカウカと時間を過ごしている我々も，バカには変わりがないのではないですかね」と言ったら「あ、あなた良い事を言いますね、なるほど、我々もバカですね」と言って、前にいた人が場所を空けて、こっちに来て坐って下さいと吉田兼好を坐らせてくれたと書いてあります。人間なんて確かにバカなものかもしれませんね。
また、②机の上に書物を広げて、まだ会った事もない本の作者を友として、静かに一人で読書する事こそ最大の快楽である、と言っています。

③物知り顔に何でも知ってるふりをする「さかしら」は最悪だと書いてあります。
④また 小野道風という人がいたのですが、小野道風は日本の三筆と呼ばれた大変な能書家で、書いたものは非常に価値が高いとされていた。その小野道風が書いた和漢朗詠集を大切にいつも持ち歩いて得意そうに見せている人がいたので、ある人が「あなた、和漢朗詠集は小野道風の後の時代のものでしょう、そんなものがあるハズが無いでしょう」と言ったら、「その有るはずの無いものがあるのが珍しい」と言ってなおさら大切にして見せて回ったというバカな話が書いてあります。
⑤また日野資朝という人は気性の激しい人だったのですが、ある時宮廷に行ったら、位の高い年老いて腰がまがって、髪がまっ白、ヒゲも白い老僧がいて、「なんと尊い姿だろう」と宮廷の位の高い人がおがんでいたので、日野資朝が横から「ただ年とっているだけでしょう」と言ったのですが、また、そう言っただけでなく、２、３日して老いさらばえてヒゲも白くなったよれよれの犬を連れてきて「どうです、尊いでしょう、あなたに差し上げます」と言った。という話が書いてあります。これは、ちょっとやり過ぎではないかとも思いますが、兼好は日野資朝の徹底した合理精神に共感しているのです。
⑥また、兼好の合理精神を表す例として、ある時、御所を建てようとしたら，大蛇が沢山出てきた。たたりになるからヘビを動かす事が出来ないと騒いでいたら，上の一人が、ただのヘビだ、動かせば良い、と言って川の方へ移動させた。その後、建築にはまったくたたりはなかったという話が書いてあります。これも兼好が合理精神に共感をしているわけです。今から７００年も前の話です。
（スライド１０６）⑦ある時、 沢山の人を引き連れて出雲の神社にお参りした人がいた。お宮に到着すると狛犬が二匹置かれていて、それが後ろ向きに置かれてあった。すると「皆さん、これは珍しいものを今日は見ましたね。これにはきっと深い由緒や由縁があるのでしょう、尊い事です。」と涙ぐんで皆にも帰ってからみやげ話になりますとおがませた。で、通りかかったお宮の人に、この狛犬は後ろ向きに置いてあるのはきっと深い由緒や由縁があるのでしょう、是非お聞かせ下さい、と聞いたら「また、コドモがイタズラをして」
こういう日常生活の身近な生き生きとしたものの中に面白さを見つけて書いています。合理精神とユーモアに富んだ面白いものです。
（スライド１０７）日本ばかりでなくアメリカにも、ソローという人が随筆を書いています。「森の生活」ウオルデン、というこの本ですが、１８４５年から４７年の２年間をこの自分で設計して一人で作った小さな小屋に住んでこの本を執筆しました。３メートルX4メートルくらいのほんの小さな小屋です。殆ど方丈記の方丈庵と変わらないサイズです。この小屋から細い道を下りて来ると、ウオルデンという池が有ります。そこで毎日水浴をしたり、文章を書いたりの生活をしました。ソローは仙人のような人ではなくて、小屋を自分で作ったり、池の深さを測ったり、植物を観察したり、事実を冷静に合理的に見つめようとしました。身近なも

のを醒めた目で客観的に見つめて書いています。レーズンの入ったレーズンパンはソローの発明と言われています。また父親の家業が鉛筆を作っていたので、その鉛筆の改良発明をしたり実際家のリアリストであった。また、生きている事とは世の濁りにそまないで生きる事こそ本当に面白いことである、という事を書いています。

（スライド１０８）このウオルデンの池はニューヨークから車で５時間のボストンの手前１時間の所に有って、僕はボストンにサムという友人がいて、何回か訪ねて泊めてもらっていますがその途中でいつもウオルデンの池に止まって、ソローが水浴をしたと同じ水で毎回水浴をして来ました。

（スライド１０９）ソローの小屋というのは今復元されてこのように立っていますが、実際に建っていた場所ではなくちょっと離れた所に建ててあります。

ソローが２年間住んだ後で小屋は取り壊されました。５０年経った１９００年頃になるともうどこに建てたのかが風雨や自然の力によって全くわからなくなっていました。

（スライド１１０）ロビンスという 人がいて、どこに本当に建っていたかを数年がかりで、考古学的な調査を綿密にやって、釘や暖炉の煉瓦などを見つけ出して、１００年後の１９４５年にやっとここだという地点を見つけました。”Discovery of Walden”というこの本を出版しています。

（スライド１１１）エジプトのピラミッド発掘と同じような情熱を持って、ソローのボロ小屋の暖炉の後を発見して喜んでいるという、まあ、物好きな人ですね。

（スライド１１２）これから１００年、２００年、数百年経っても再びわからなくなる事が無いように、このように大きな石の杭を１０本も打ち込んで、ここですよ、これならもう大丈夫でしょうという恐ろしいばかりの情熱が感じられて、僕は坐ってみました。

（スライド１１３）ソローはこの小屋のこのベッドで寝起きして２年間一人で住んで、この世の濁りにそまないという随筆を書きました。出版した当時は全く売れなくて在庫が山をなしていました。ソローが亡くなって数十年経ってから一般の人も読むようになって、１５０年経った今ではアメリカ中どの本屋でも置いていない所はないというアメリカの重要な知的財産になっています。

随筆というのは、ごく身近なものの中に、光ったものを見つけてそれを作品とします。

（スライド１１４）映画の世界にも、小津安二郎という人はごく身近なものの中に、光ったもの、面白いものを見つけてそれを映画作品とした人です。彼の作品は随筆の精神で作られた映像作品とも言えます。

（スライド１１５、１１６，１１７）これは，１９３０年、２８才の時の「生まれてはみたけれど」という無声映画です。子供の世界、大人の世界をリアリストとして見つめながら、笑いに満ちた作品です。

（スライド１１８、１１９，１２０，１２１，１２２，１２３）「サンマの味」という１９６２年、

６０才で亡くなる寸前の作品です。壮年になった３人の友人が昔の恩師を招いてクラス会をする、生活感のある会話に、リアリズムとユーモアに満ちた笑いに満ちた映画です。
小津の作品は随筆の精神で作られた映像作品といえます。
ごく身近なものの中に、光った面白いものを見つけて、また、世の濁りに染まないものを作品とする随筆の精神は随筆だけでなく映画、絵画などにも芸術の大きな流れとなっています。芭蕉や良寛もこの随筆の精神で生きています。
この精神は実は、最初にお話したセザンヌの、リンゴなどのただの身辺の普通のものを描こうとした精神とも通じています。
今日は、種々の芸術の分野に一貫した随筆の精神というものがあるという事をお話しました。
有り難うございました。